2005－9

週刊読書人

毎週金曜日発行
定価　230円
本体　219円
株式会社 読書人 発行
東京都新宿区矢来町109
郵便番号162-0805
電話　03(3260)5791(代)
FAX　03(3260)5507
振替口座　00150-9-57070
前金購読料50週11500円
http://www.dokushojin.co.jp
©株式会社読書人2005

現代中国を理解するために

対談＝橋爪大三郎・天児慧

天児慧著『巨龍の胎動——毛沢東VS鄧小平』（『中国の歴史』第11巻 講談社）の刊行を機に

天児慧氏の『巨龍の胎動——毛沢東VS鄧小平』が、講談社の『中国の歴史』（全12巻）の第11巻として刊行された。毛沢東と鄧小平という二人の巨人の軌跡とその絡み合いを切り口としながら、中国近現代の歴史をたどった力作である。一三億近い人口を有して世界史に大きなインパクトを与え始めた現代中国。この『巨龍』をどうとらえるか。天児氏と社会学者の橋爪大三郎氏に対談をお願いした。（編集部）

天児　慧氏

橋爪　大三郎氏

橋爪　講談社から全12巻の『中国の歴史』というシリーズが刊行中で、その第11巻として天児さんの『巨龍の胎動』が出ました。さっそく読みましたが、大変面白かった。中国の現代史に関して言えば、中国がここまで大きな存在になってきたからこそ、二十年前、三十年前、五十年前の事件の意味合いがありありと見えてくると思うんです。そういう意味で、歴史を見る視点の変換があったというのが一つ。もう一つは、アメリカや中国や日本の研究者が書いたものを適切に引用し、客観的な最新の像を入れ込んでいるですから、これ一冊を読むと、専門家の間で今どのような議論が行なわれているかがおぼろげながら見えてきます。さらにもう一つ、認識の枠組みが変わってきたなと思いました。以前は、左翼的というか、冷戦的なパターンがあったように思いますが、それが抜けてきて、いろいろな文脈から自由に中国を見ることができるようになった。これらの点に刺激を受けました。

天児　現代史を語ることは実はすごく難しくて、不安もあるし、ある意味では危険でもあります。本当にこれを書いていいのだろうかと反芻しながら書いている。そういう意味では歴史の解釈をチャレンジとして進めていかざるをえない面があるのですが、そこで大事なのは、今おっしゃったように、視点の問題です。私が中国研究を始めたのは文化大革命の時期で、毛沢東が礼賛され、文化大革命も高い評価を受けていました。それが後にがらがらと崩れていくわけです。なぜアメリカと中国がニクソン訪中で手を繋がなければいけないのか。なぜ文革の旗手であった林彪が失脚したのか。想像もできないようなショッキングな出来事が次々と起こって、そのために当時の中国研究者はかなり精神的に打撃を受けました。私はまさにそういう状況の中で中国研究を始めたわけですが、中国を理解するためには、既成の枠組み、方法論を使っていたのではだめだと痛感しました。

認識の枠組みの変化

ショッキングな出来事が相次いで

そうした時に出会ったのが、竹内実さんが監修した『毛沢東集』です。『毛沢東選集』というのがあって、これは四九年以降、中国がこれまでに大きな存在になってきたからこそ、二十年前、三十年前の事件の意味合いがありありと見えてくると思うんです。そういう意味で、歴史を見る視点の変換があったというのが一つ。もう一つは、アメリカや中国や日本の研究者が書いたものを適切に引用し、客観的な最新の像を入れ込んでいるですから、これ一冊を読むと、専門家の間で今どのような議論が行なわれているかがおぼろげながら見えてきます。さらにもう一つ、認識の枠組みが変わってきたなと思いました。以前は、左翼的というか、冷戦的なパターンがあったように思いますが、それが抜けてきて、いろいろな文脈から自由に中国を見ることができるようになった。これらの点に刺激を受けました。

天児　現代史を語ることは実はすごく難しくて、不安もあるし、ある意味では危険でもあります。本当にこれを書いていいのだろうかと反芻しながら書いている。そういう意味では歴史の解釈をチャレンジとして進めていかざるをえない面があるのですが、そこで大事なのは、今おっしゃったように、視点の問題です。私が中国研究を始めたのは文化大革命の時期で、毛沢東が礼賛され、文化大革命も高い評価を受けていました。それが後にがらがらと崩れていくわけです。なぜアメリカと中国がニクソン訪中で手を繋がなければいけないのか。なぜ文革の旗手であった林彪が失脚したのか。想像もできないようなショッキングな出来事が次々と起こって、そのために当時の中国研究者はかなり精神的に打撃を受けました。私はまさにそういう状況の中で中国研究を始めたわけですが、中国を理解するためには、既成の枠組み、方法論を使っていたのではだめだと痛感しました。

対談＝現代中国を理解するために

対象に対する距離感

日本の過去の中国研究は優れていた

〈1面からつづく〉

天児　E・H・カーの言うように、歴史とは過去と現在、未来との尽きることのない対話だと私は思っています。私の歴史の解釈は間違っているかもしれない。それでも未来の像を見たいとなれば、過去に遡って、ロンガルな流れの中で、こういう可能性があるという捉え方をするしかないのですね。胡錦濤、温家宝の路線を「脱鄧小平」だと大胆に書きましたが、中国の人には批判されるかもしれない。しかしそれはネーミングの問題としていま中国が問われているのはまさにそういうことだと思うんです。橋爪さんがうまくおっしゃってくださったように、ラオバイシンの世界から見直してみると見えてくるのですね。我々は表面的に中国の肥大化ばかりを見ていますが、それだけではない部分がある。今の第三、第四世代はそこで格闘しているわけです。その積み重ねと流れが、書く人間にとっては無限に興味を引き出してくれる。

天児　慧氏

橋爪　私が外国を研究する日本の人びとに多少不満があるのは、みんな研究対象を好きになるんですね。惚れるんです。その分、リアリズムから離れて相手の像が歪む。アメリカの地域研究者の仕事を読んだり、話をしたりして感じるのは、彼らは研究対象を「仮想敵国」として考えている。日本研究者の場合でも、日本人とは友人になりますが、どこかに冷たく鋭いものがあります。日本の文化や経済や社会や思想を研究し理解して報告するのですが、それは結局、アメリカの国益のためにやっている。そういうところが多少あります。日本の場合は、かつて中国を敵国と考えて大失敗したわけですから、中国を敵視してはいけないというのが当然の前提になっている。敵視する必要はないのですが、適切な距離感がなければ研究はできない。正確な情報や知識があることが日米双方のためになるのですから、そういう距離感を大切にして過去の歴史や文化や思想を研究していけばいい。日本の研究もそういう方向に進んでいって欲しいなと思っていた時に、そういう方向で書かれた本を読んだので嬉しく思いました。

この本でもう一つ面白かったのは、最後のところに出てきますが、南開大学の日本研究院での講義の話です。講義といっても一方的に話すのではなく、中国の学生諸君と現在の問題について、あるいは近過去の問題について対話をした。これは生産的な試みとして私は高く評価しました。それともう一つ、台湾の学者や中国の学者にこういう問題について対話を投げかけておられる。この本で取り上げた中国の現在の問題、将来の問題は、中国の学者が真っ先に考えていることですね。彼らの考え方と私たちの考え方とは当然違います。ですから、それをぶつけて対話をすることが、彼らにとっても利益になる。そういうスタンスで中国の近現代史研究を進めておられることを、大変心強く思いました。

天児　地域研究の対象に対する距離感の問題は、まさにおっしゃる通りだと思います。私は日本の過去の中国研究は非常に優れていたと思うんです。中でも説得力があると私が思ったのは橋爪さん。橋爪さんは満鉄調査部に長いといて、そのあと農林省で活動しましたが、彼の『中国革命史論』や『支那社会研究』を見ると、中国の過去の歴史の知識もあるし、当時の現状をつぶさに見ながら書いている。すごいなと思いました。そういう人が過去に何人かいたわけです。その遺産が戦後にふち切られてしまった。竹内好さんの影響が大きかったと思います。遅れたアジアという考えは間違いだという竹内さんの問題の提起は、視点を変える意味では面白かったのですが、結局日本の過去を全部否定するという方向に議論が流れてしまった。しかも、そこに新中国の美化されたイメージが全面的に入り込んできた。戦後の日本の中国研究の流れを見た時に、そこが一つの大きなポイントだったと思います。

南開大学の話は、今後の問題を考える時に正面から議論しないと本当の理解はできないと考えたからです。もちろん反論はありましたが、結局日本の過去を全部否定するという方向に議論が流れてしまった。しかも、南京虐殺の問題にしても、暗黙の儒教道徳、暗黙の仏教といったものに彼らは強く規定されていて、しかもそのことを十分言語化できていない。毛沢東思想は、それでも、暗黙の儒教道徳、暗黙の仏教といったものに彼らは強く規定されていて、しかもそのことを十分言語化できていない。毛沢東思想は、スターリニン主義を創造的に発展させたものかもしれないけれど、私たちから見れば中国的に変化した、儒教や道教や仏教の要素が入り込んだものに見えます。私たち日本人に研究の利点があるとすれば、儒教や道教や仏教のテキストを破棄したり忘れ去ったりしないで、細々とではあるけれど継続的に研究してきた点です。漢字が読めるのも大変な利点で、アメリカにも漢字が読める専門の研究者はいますが、絶対量からいえば日本は百倍、千倍、一万倍の素地があって、これを自身が近現代史を一貫して記述することができずにいるという側面もあって、たとえば『毛沢東選集』が改竄されたという話があります。中国の研究者はこれを前提に論文を書くことはまだできないと思います。言論の自由がないし、制約がある。道教や仏教についての知識もほとんどない。そこは、たとえば香港の中文大学の図書館を利用できます。香港に事務所を置いて中国のデータを蓄積してきたアメリカのCIAが、中国民国家がある特殊な歴史の背景の中で形成されてきているから、ネーション・ステイトという意識も強い。ですから、端的なポリティカル・サイエンスの中の外交論で分析してもほとんど理解できるという議論がわりと多いのですが、状況を細かく見ていくと少し事情が違ってきます。たとえば、第一期のクリントン政権の時に、MFNという最恵国待遇と人権を結び付けるか付けないかという議論があって、結局一九九四年に分離した。人権が進展しなくてもMFNは承認すると言わざるを得なかったわけです。その時に、ある中国研究者が「爽を殺った。爽を制した」と言った。「爽を以って爽を以って」の爽はアメリカの経済界で、制された爽はアメリカの政治です。そうした伝統的な思考がずっと入ってくるその意味では、橋爪さんがおっしゃったように、無意識ではあっても過去から伝わる文化が脈々と生きていると私も感じます。

> 中国の人と話をしていると、彼らは合理的なことを言いますが、実際に中国を動かしているのは、無意識の大きな力ではないかという気がするのです――橋爪

橋爪　私たちが中国を学問的に研究する場合に、最初に立脚しなければいけないのは、スタンダードな社会科学です。国際政治でしたらリアル・ポリティクスでなければ説明できます。でも、中国風に言うと、国ごとに国情が違う。中国の場合に国情が違うのは、中国を制約する伝統、無意識という言葉でよんでもいいものなのですね。これを二番目の補助線とすると、より正確な像を結ぶだろうと思います。具体的に言うと、中国とベトナムの関係、中国と朝鮮半島の関係、中国とチベットの関係、中国と台湾の関係を考える時に、そこにはリアル・ポリティクス以上のものが働いている。中国と日本の間にも働いている。

台湾を考えるのに、この本には斬新な提案があって、私もそれに賛成です。一国二制度では台湾の人の同意を得られないから、そこからもっと踏み込んでいくべきだ。台湾は独立宣言すらせず、中国の一部としてのアイデンティティを捨てない。中国の側は台湾の主権、国際社会での地位を認める方向で譲歩すべきである。これは中国がどういう提案なら受け入れられるかとか、日本は平和一作を一生懸命やっているとかいう話しないと出てこない考えで、台湾が独立宣言をしてしまったら、それが譲れない一線になってしまう。リアル・ポリティクスから見てどんなに不合理であっても、軍事行動の選択肢を採らないともたない状況が出てくる。そのようなことを正確に分析していってはじめて、日本政府の対応も、日本人としての対応も考えられるのですね。

天児　先ほどおっしゃった、我々が原資料から歴史を捉え直し、そのことをもって中国に語りかけていくというのは、非常に大事なご指摘だと思います。ただ、たとえば日中戦争の問題で事実を明らかにしようとした時に、戦争で日本が負けた後、ほとんど何も持たず逃げてしまったので、大事な資料が中国にそのまま残っていて、これが見れない。日中の間でいろんなレベルのセンシティブな問題も少しずつ議論が始まっていますが、本当のところは中国に残された資料が開示されないと限界がある。そういった資料が開示されないと限界があるし、かつ、なぜ開示しないかというと、どうしても中国の今の体制の問題に行きつくわけです。中国の今の共産党体制は、自らの正統性を革命の勝利、民族の解放に置いていて、そのことからくる限界がある。日中は過去にもっとうまくやっていたと、日本は平和一作を一生懸命やっているとかいう話げになっていた政治的自由化も指導部の内部では研究されていて、具体的なスケジュールにあがっているという感触を私はもっています。中央党学校などでは、相当踏み込んだ研究がなされていると聞いています。ということから考えて、十年から十五年のオーダーで共産党離れが起こる。共産党の名前は残っても、実質的な統治構造は変化していくと思うんです。

中国が歴史問題について態度を変える可能性も極めて高い。日中が歴史問題で揉めて誰が一番得をするかというとアメリカです。アメリカの相対的な国力が小さくなり、中国の相対的な国力が大きくなって、それにふさわしい地位を占めようとした時に、インド、ロシア、そして日本の協力が必要になってくる。もちろん最終的にはアメリカの協力が必要ですが。少なくても日本を中国の意思の通りに動かせる駒の一つにしたいという欲求が出てくる。そうすると、歴史問題のこじれは中国にとって大きな損害になります。現在の執行部は江沢民と違って、歴史問題について態度を変えるというサインを送ったことがあって、この問題に早晩決着をつけようとするはずです。ですから私は、じっくり待っていればこの問題は解決できると思っています。

天児　歴史問題に関してはその中にある対日の独特の代はじめにも起こっていますが、規模が小さいし、力で潰せた。ところが、最近は潰せない。しかも胡錦濤政権になってから社会の矛盾が深刻化してきているのが気になります。昨年はいろんなところで大規模な騒動やデモ、ストライキが起きました。九〇年代は、矛盾のはけ口として反日が使われるという悪循環ですが、けっしていがみ合う必要はないのですね。リアル・ポリティクスはリアルで、政府は日本に大いに感謝した。こういう日中連携が民間では明治時代の基本的なスタンスでした。欧米からは黄色人種ということで一括りにされていたわけで、こういう文脈に引き戻している欧米列強の植民地政策に反対したということで、清国は日本に大いに感謝した。こういう日中連携が民安保保障などはしっかり維持していくべきだと私は思いますが、文化に関しては、宰直に意見を言い合えばいい。そのためのいろいろな視点で、それを語る言葉を日本の側が用意していく。天児さんの本もその一助になるでしょう。それが将来に向かって日中関係を開いていき、世界に平和をもたらす一番の近道だと思います。

> 日中の間でいろんなレベルのセンシティブな問題も少しずつ議論が始まっていますが、本当のところは中国に残された資料が開示されないと限界がある――天児

率直な意見の交換を

理念でなく現実の世界としてのアジア

橋爪　歴史ということでという事件がありました。欧米列強の植民地政策に反対したということで、清国は日本に大いに感謝した。こういう日中連携が民間では明治時代の基本的なスタンスでした。欧米からは黄色人種ということで一括りにされていたわけで、こういう文脈に引き戻している